


在外研究員研究報告書

2018年9月28日 受付

所 属	文学部		氏 名	中 村 拓 也 	
職 名	准教授				
研究課題名	自我の一人称的パースペクティブと社会的次元についての研究				
研究期間	2016年 4月 1日 ~ 2018年 3月 31日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2016年4月1日 ~2017年3月31日	デンマーク	コペンハーゲン大学主観性研究センター		
	2017年4月1日 ~2018年3月31日	ドイツ	ケルン大学フッサール文庫		
研 究 費	<del>300</del> 306.6 万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名 Vol. No.		発行年月日	
	Das Ich der Instinkte in Husserls Manuskripten über die Lebenswelt	Interpretationes Vol VIII/ N°1/2018		2018年10月発行予定	
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
	(翻訳・単著)ナミン・リー『本能 の現象学』	晃洋書房		2017年1月20日	
	(翻訳・単著)ダン・ザハヴィ『自 己意識と他性』	法政大学出版局		2017年5月22日	
	(翻訳・単著)ダン・ザハヴィ『自 己と他者』	晃洋書房		2017年11月10日	
演 題	講 演 学 会 名		講演年月日		
The radicalized reduction and primal ego	Phenomenological Research Seminar, Center for Subjectivity Research, University of Copenhagen		2016年12月13日		
Das Ich der Instinkte in Husserls Lebenswelt	Diplom-Seminar an der Karls-Universität in Prag		2017年12月1日		
Phänomenologie des Unbewussten als Grenzproblem bei Husserl	Phänomenologische Werkstatt, Husserl-Archiv der Universität zu Köln		2018年1月30日		

今回の二年にわたる在外研究は、後期フッサールの原自我と先自我を具体的包括的統一として解明すること、さらには原自我のもつ一人称的パースペクティブと人格的自我の先行形態としての先自我の検討を通して、自我のもつ社会的次元、相互主観的な社会的関係を、生世界の問題構制との連関で批判的に考察することを目的としていた。

その目的を達成するために、2002年に自らが創立した主観性研究センター所長であり、世界的に認められたフッサール現象学の権威であるダン・ザハヴィ教授（コペンハーゲン大学）の許でザハヴィ教授をはじめとする主観性研究センター所属の研究者や客員研究者との緊密な協力関係を築きつつ2016年4月から2017年3月まで当地で研究を行った。その後、2017年4月から2018年3月まで、ドイツでのフッサール現象学の研究の中心であり、フッサールの未刊草稿を所蔵しているケルン大学フッサール文庫で所長のディーター・ローマー教授（ケルン大学）の許で、フッサールの未刊草稿の閲覧・調査をはじめとする研究を行った。

上記の研究目的の設定の背景は以下のとおりである。2006年によく公刊されたフッサールの後期の時間分析についての草稿を集成した『時間構成についての後期テキスト（1929-1934）——C草稿』のなかで、フッサールは超越論的主観性の最深層で働くが、現象学的分析によっては捉え難い原自我（Ur-Ich）に突き当たっている。原自我は、いわゆる上記のC草稿だけではなく、フッサールの中に属する『時間意識についてのベルナウ草稿（1917-1918）』ではじめて、しかしなお未整備な形で導入され、さらには最晩年の思索である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のなかでもC草稿とは異なる仕方でフッサールによってかなりまとまった仕方で論じられている。それに対して超越論的主観性の全容の解明にとって同じく重要な先自我（Vor-Ich）は、フッサールによって必ずしもまとまった論述をされておらず、原自我概念の取り扱いに比較してもごくわずかでしかも散発的な仕方而言及されているにすぎない。こうした両概念にも深く関係する1930年代の後期にあたるフッサールの思索を集成した『現象学の限界問題——無意識と本能についての分析・形而上学・後期倫理学（遺稿によるテキスト1908-1937）』が2014年に公刊され、資料の面ではかなり充実してきたが、それでもなお未公開のテキストを参照することが原自我と先自我の問題の解明にとっては必須であった。同時に、フッサールの主観性理論、自我論、時間意識論に関して、他の哲学的伝統で論じられている自己意識論や反省理論との関連を指摘しつつ、先反省的自己意識論という強力な解釈図式をフッサール研究に導入することによって現象学研究を革新したダン・ザハヴィが、原自我の一人称的性格を強く主張している。哲学の原理的根源として原自我についての分析と解明はそれ自体ですでに魅力的な哲学的主題であるが、一方で、人格的自我の萌芽としての先自我のもつ社会的次元がどのようにそうした原理的根源にある自我としての原自我と関係するのかは、これまで十分には解明さ

れてこなかった。しかし、この先自我と原自我の統一的解釈を提示することによってはじめて説得力のある仕方で現象学的自我分析のもつ社会性、相互主観的な社会的関係に対する現象学の哲学的寄与可能性を明らかにすることが可能になる。これが後期フッサールの原自我と先自我を具体的包括的統一としての解明を研究目的として設定した根拠である。その研究の直接的な成果としては以下の四点を挙げるができる。

1. 論文（単著）“Das Ich der Instinkte in Husserls Manuskripten über die Lebenswelt,, , in: *Interpretationes* Vol VIII/ N°1/2018
2. 翻訳（単著）ナミン・リー『本能の現象学』晃洋書房、2017年1月
3. 翻訳（単著）ダン・ザハヴィ『自己意識と他性——現象学的探究』法政大学出版会、2017年5月
4. 翻訳（単著）ダン・ザハヴィ『自己と他者——主観性・共感・恥の探究』晃洋書房、2017年11月

1. の論文「生世界についてのフッサールの草稿における本能の自我」(Das Ich der Instinkte in Husserls Manuskripten über die Lebenswelt) は、プラハのカレル大学のハンス・ライナー・ゼップ教授の招聘によってカレル大学で行った講演を拡充することで成立した。後述するナミン・リー『エドムント・フッサールの本能の現象学』(1993年)によって現象学の主要問題の一つとなった本能についての現象学的分析を踏まえた上で、やはり後期フッサールの最重要概念の一つであり、哲学をはじめ社会学に対しても大きな影響力をもった生世界についての思索を集成した『生世界——あらかじめ与えられる世界とその構成の解示——草稿によるテキスト(1916-1937)』に収録された本能に関連する草稿によりつつ、広い意味での自我異他的なものを表す流れることと自我の先後関係を本能を媒介とすることによって明らかにしようと試みた。

具体的には、フッサールは1910年代の半ばから構成過程が完了した対象の分析を主題とする従来の静態的現象学から、それと並行してさらに現象の発生過程を遡って問う発生的現象学的方法を導入する。それによって、発生 of 始原が問題となることになる。そうした現象の始原への問いの果てに、自我的な現象の側には先自我が、非自我的な現象の側には流れることが見出されることになる。もちろんこれは、区別することができるが、分離することはできない事象であり、流れることからの触発と先自我からの本能の両者による混淆体こそが主観性の始原に見出されることになる。こうした区別可能であるが分離不可能である混淆体こそが、主観性の始原にあり、同時に何らかの始原的な意味での関係性である。したがって、主観性のこの位相で働く先自我は関係性、さらに言えば周囲世界や他者を含めた自我異他的なものとの始原的關係性を結んでいる。この意味で、この始原の先自我こそが、十全的な社会的関係を生きる自我の社会的次元として的人格の萌芽であることを明らかにした。もっとも、この先自我がどのような仕方で始原の混淆体から具体的社会関係を結ぶ自我として的人格にまで展開していくのかはさらに問うべき課題として残された。

2. Nam-In Lee, *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte*, Kluwer Academic Publishers,

1993の翻訳。現在ソウル大学の教授であるナミン・リーの『本能の現象学』は、本能や衝動についてのフッサールの分析がまだ未公開であったときに膨大な未整理の未刊草稿を縦横に読み解き、従来は理性主義の哲学者と捉えられていたフッサールに、本能や衝動といった事象への分析が存在し、しかもそれがフッサールの超越論的現象学にとって派生的な分析に終わるのではなく、むしろ欠くことができない基礎的な部分であることを明らかにした。こうした意味で現象学研究に新地平を拓いた研究として世界的に評価される単著である。超越論的現象学が従来から知られていた静態的現象学と新たに草稿を読み解くことによって明らかにされた発生的現象学の両方から成立していることを説得的に開明し、その後静態的現象学と発生的現象学との区別は、フッサールの超越論的現象学にとっての現在の研究の基本構図となっていることからその革新性と影響力を知ることができる。この研究の翻訳を通して、当該書の枢要な部分で、原自我と先自我が研究史のなかではじめて重要概念として取り上げられ、詳細に論じられている。翻訳を進める過程での著者ナミン・リーとの協力関係に基づく質疑応答によって、研究目的の達成にとって重要な原自我と先自我の統一的解釈への大きな足掛かりを得ることができた。

3. Dan Zahavi, *Self-awareness and Alterity. A Phenomenological Investigation*, Northwestern University Press, 1999の翻訳。ダン・ザハヴィ『自己意識と他性——現象学的探究』は、2016年度の受け入れ機関であったコペンハーゲン大学主観性研究センターの所長ザハヴィ教授の哲学的著書である。ザハヴィは、先反省的自己意識という事象をサルトルの現象学からフッサールの現象学に持ち込み、いっそう明晰な分析を主観性の最深層で生じている事象に対して加えている。同時に、ヘンリッヒやフランクに代表されるハイデルベルク学派の自己意識の反省理論との問題の共有と現象学的分析の強みを打ち出している。さらには、自己意識の捉え難さと他性の捉え難さにある種の共通性を見出し、その捉え難さそのものは、決して消極的・否定的に捉えられるべき事象ではなく、こうした根源的位相で生起する事象の本有的性格であることを明らかにしている。原自我と同等視されるに至る一人称パースペクティブについての現象学的考察と、自我の最深層にすでに入り込む他性への詳細を極める分析という研究目的と深く関連するこうした主題について、翻訳作業を進めながら主観性研究センターで定期的に行った直接面談の上での質疑応答の際に著者ザハヴィと議論を深めることで、さらに研究を掘り下げるための重要な手掛かりを得ることができた。

4. Dan Zahavi, *Self and Other. Exploring Subjectivity, Empathy, and Shame*, Oxford University Press, 2014の翻訳。原書は3.と同じくザハヴィ教授による単著である。3.の公刊から約15年を経て、ほぼ主観性研究センターの設立と重なる期間に積み重ねられてきた積年の研究成果を集成した現代現象学の到達点を示す研究である。フッサールをはじめとする現象学的哲学者についての緻密で卓越した洞察に基づきながら、狭義の哲学に収まらず境界領域にある心の理論、心の哲学との積極的な交流と相互の妥当性の検証を通して、自己と他者という伝統的な問題の解明に、とりわけ現象学的共感理論を用いることで寄与している。研究目的である原自我と先自我の問題とも密接なかかわりのある自己についての多元的説明

や相互人格的理解の問題について3. の翻訳作業と同じく主観性研究センター滞在の際に原著者と直接踏み込んだ議論をかなりの頻度で定期的に交わすことができた。それによって自我の社会的次元の解明にとっての現象学的共感理論の重要な寄与可能性について今後の研究にとっての大きな示唆を得ることができた。

以上がこの度の在外研究に関して現在までに公表することができた成果の概要である。なお、2016年度の受け入れ先のザハヴィ教授には、2017年10月に同志社大学で講演会を開催していただくなど友好的な協力関係を継続中である。また、さらにザハヴィ教授については数冊の著書の翻訳による日本への紹介を予定している。さらに、ケルン大学フッサール文庫滞在時に当地での *Phänomenologische Werkstatt* で発表した内容は、拡充の上、現象学研究の専門誌として国際的に定評のある *Phänomenologische Forschungen* への掲載に向けて現在査読を受けている。また、ケルン大学フッサール文庫以外にもケルン大学人文学大学院の研究リーダーであるティーモー・ブライヤー教授とも友好的な研究協力関係を結び、ブライヤー教授には2018年10月に同志社大学で講演会を開催していただく予定である。加えて彼の最近刊の翻訳出版の計画も進めている。

以上の二年にわたる在外研究での研究成果を踏まえた上で、今後未刊草稿を含めた後期フッサールの原自我、先自我、相互主観性、自我の社会的次元などについてのさらなる研究成果は、継続的に研究発表や学術誌掲載などの仕方で出版することによって公表することを予定している。